

まえがき

人類は、古来、様々な活動をしながらか生活の変化を促し、進歩を続けてきました。特に最近の変化、進歩はこれまでとは比較できないほどに急激なものであり、人工知能の進化が私たちの社会を変えることは確実です。新学習指導要領の解説には、「人工知能がどれだけ進化し思考できるようになったとしても、その思考の目的を与えたり、目的のよさ・正しさ・美しさを判断したりできるのは人間の最も大きな強みである」という記述があります。これからの社会を生き抜く生徒たちには、急激な社会の変化に積極的に向き合い、周りの人と協働して課題を解決していくことのできるよう、生きるための基礎的な力に加えて論理的・創造的に自ら思考、判断し、行動する力と心豊かな人間力を育てていかなければなりません。さらに、持続可能な社会の実現に向け、生徒たちに、今日の様々な環境問題を理解し、その要因をくらしや活動、さらには自身の価値観や社会経済活動のあり方と関連付けて捉え、持続可能な社会に積極的に参画できる力を育成することも必要です。

本校では、今年度の研究主題を「探究的学習活動を通じた、論理的・創造的な思考力の向上～総合学習 BIWAKO TIME を幹に、カリキュラム・マネジメントによる学びを深める学習指導～」とし、これまでの成果を検証し、活かしながら、教育研究に取り組みました。文部科学省から「実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究」の委託を受け、総合学習「BIWAKO TIME」「情報の時間」「COMMUNICATION TIME」と各教科のカリキュラム・マネジメントを通じて、教科横断的に探究的な学びを深めるとともに、実社会との関連を意識し、よりよい社会の実現を視野に郷土の生活に主体的に参画する力を養うことを主眼に教育研究を進めました。また、公益財団法人日本科学技術振興財団から指定された「エネルギー教育モデル校」として、合科学習「科学技術の時間」のモデル化も進めました。これらの教育研究は、本校の教員全員が協働して内容を精選し、主体的に実践し、検証することを基本とし、滋賀大学の教員のかかわりをこれまで以上に進め、授業評価も含めた実践研究をより深めることを目的とした体制作りを進めました。

平成30年9月には、国際日本文化研究センター教授 山田奨治先生を中心に、本校教員も執筆いたしました『びわ湖のほとりで35年続くすごい授業』をミネルヴァ書房から発刊し、本校の調査探究型授業（総合学習）の実践の成果を広く発信いたしました。山田先生のご尽力を得て、これまでの本校の教育・研究活動の内容と成果を整理し、検証ができましたことは、たいへん有意義で貴重な機会でありました。さらに、今回、ここに本年度の本校の研究の成果を広く公表いたします。皆様からのご批評を仰ぎ、今後の教育研究に活かし、発展させていくことができるよう努めてまいりたいと考えております。様々な方々からのご意見、ご助言を真摯に受け止め、自己評価と改革を行い続け、「学び続ける教師像」を具現化する存在でありたいと思います。そして、本校の教育研究が我が国の学校教育に貢献できますよう、今後も努力してまいりたいと思います。どうぞ多くの皆様からの忌憚のないご意見やご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成31年（2019年）3月

滋賀大学教育学部附属中学校 校長 久保加織